



抱きしめられて

〈埼玉県〉

にいやま めぐみ
新山 恵 41歳

2012年、40歳目前で待望の2人目を授かりました。ピクピクと元気に動く小さな心臓をエコーで確認し、大喜びで区役所へ母子手帳を受け取りに行った数日後、突然の出血があり、病院に駆け込むと、既に赤ちゃんの心臓は止まっていました。稽留流産けいりゅうさんという診断で、約半月後に赤ちゃんを取り出す子宮内容除去手術が決まりました。

手術当日の朝、担当の看護師さんが初めて私の病室を訪れた時、白衣の胸元には、カタカナで書かれたネームバッジが付いていました。日本人ではない看護師さんに、ちよっただけ残念な気持ちになりました。

その看護師さんは、少し違和感のある日本語で「大丈夫ですか？ 手術は心配いらないよ」と、何度も病室へ来て

くれました。そして何度目かの何気ない会話の中で、ふと「泣いてもいいんだよ」と、私に言ったのです。とても驚きました。でも、次の瞬間、自分でもなぜだか分からないけれど、とめどなく涙があふれてきたのです。

「今までつらかったね、赤ちゃんが死んじゃったのはママのせいではないんだよ」と、何度も何度も優しく私に語り掛け、抱き締めてくれました。

そうだ、私は誰にも本心を語れず、1人心を閉ざしていたのかもしれない。「流産は仕方がないこと」と頭では分かっていたても、もしかしたら、赤ちゃんの心臓がまた動き出すかもしれないと、手術直前まで諦められずにいた。できることなら、私がおばあちゃんになつて死んで骨になるまで、ずっとお腹

の中に置いてあげたかった。「元気に産んであげられなくてごめんなさい」と、ずっと思っていた。看護師さんは、手術前、気丈に振る舞うそんな私の心に付き、寄り添ってくれたのです。

手術から2年後、幸運にも妊娠、出産しました。赤ちゃんを失った悲しみを忘れることはできませんが、あの日、大泣きして看護師さんに優しく抱き締められたから、私はその後、前を向き、再び母になることができました。